

複合名詞のアクセントの変化と語種

白 勢 彩 子*

日本語学・日本文学分野

(2014年8月29日受理)

要 旨

首都圏アクセントの変化について、複合名詞のアクセントを取り上げ、特に語種との関わりについて調査した。資料には、アクセント辞典および自発発話音声の大規模コーパスを用いた。分析の結果、資料間で共通して、漢語でより変化の進行が早いことを示唆する結果が得られた。

キーワード：首都圏アクセント、複合名詞アクセント規則、アクセント変化、語種

1. はじめに

日本語では、複合語を形成すると、その語のアクセントは構成要素の性質に応じて規則的に決まる。名詞と名詞が結合する複合名詞では、複合語が5モーラ以上となる場合、主に後部要素のモーラ数、アクセント型によって決まることが知られている [1],[2]。

複合名詞アクセント規則の変化について、筆者らは、アクセント辞書データおよび自発発話音声の大規模データに基づき検討を行った [3]。分析の過程で、語種によるアクセント変化の相違が観察されたものの、紙幅の都合上、詳細を議論することができなかった。そこで、本稿では、この問題に焦点を当て、検討を展開したい。

2. 複合名詞のアクセント

本稿では、2要素から成る複合名詞で、前部要素が3モーラ以上、後部要素が2モーラのもの（以下、適宜、「3モーラ以上+2モーラ」等と表記する）を対象として議論する。複合名詞のアクセントの中でも3モーラ以上+2モーラ以上のアクセント規則は先行研究

[1],[2]によって詳細に整理され、概して後部要素の性質によって複合名詞のアクセントが決まることが示されている。

3モーラ以上+2モーラの複合名詞について、複数の研究 [1]- [5] に基づき、以下の1. ~ 3. のように規則をまとめた。語の例示は、『新明解アクセント辞典』に基づく。「'」はアクセント核の位置を示し、語の末尾の右肩の「⁻」は平板型を示す。

1. 後部要素が尾高型、平板型の場合、前部要素の最終モーラにアクセント核が置かれる。(先行則)

イヌ' : アキタ' イヌ

ムシ⁻ : クツワ' ムシ

2. 後部要素が頭高型の場合、アクセント核位置が複合名詞のアクセント核の位置となる。(保存則)

ア' セ : アブラア' セ

3. 後部の語（多くは尾高型）により、平板型の複合名詞となる。(平板則)

イロ' : ミドリイロ⁻

なお、上記の語の例はいずれも和語である。語種の問題について触れると、佐藤(1993)、Kubozono(1997)、田中・窪蘭(1999)は、明示的に語種を指定した規則

* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

を立てていない。一方、秋永(2001)は、漢字音であるか、和語名詞か、外来語かによって規則を分けて扱うという相違がある。

上記の先行則では、前部要素の最終モーラが長音、撥音といった特殊拍や母音の無声化拍となる場合、アクセント核が置かれにくく、一モーラ前にずれて発音される。

3. アクセント辞典に基づく複合名詞アクセントと語種に関する調査

3.1 調査概要

『明解アクセント辞典』[6] (以下、「明解ア」と略す) および『新明解アクセント辞典』[2] (以下、「新明ア」と略す) を資料とし、3モーラの名詞+2モーラの名詞の構造の複合語と、そのアクセント型を抽出した。両アクセント辞典では、二通り以上のアクセントがある語は「標準アクセントとして望ましいと思われる方を先にして併記」され、あるいは、「年代的に新しいアクセントや、伝統的で古めかしいアクセントの層の目立つものに限り、((新は・・・)), ((古は・・・)), ((もと・・・)) のように示」されている。すなわち、見出しに二通り以上のアクセントが併記して示されている場合と、見出しは一例であるが小見出しとして他のアクセントが注記されている場合とがある。本稿では、見出しの第一にあるアクセント以外のアクセントも対象として分析を進める。分析対象については、白勢・張(2014)[3]と同様である。

なお、明解アおよび新明アでは、アクセント記号は、高く発音される部分を上線で示し、次が低く発音される場合に「-」を付している。本稿では、「-」が付された位置を語頭からの拍数に基づいて「1型」、「2型」のように表現し、付されていない場合の平板型は「0型」とする。但し、場合によっては語の末尾から数えた数値で示すこともあり、この場合、マイナス符号を付して示す。

3.2 結果

まず、後部要素の語種別に整理した場合、見出しの第一にあるアクセントがどのように分布するのか把握するため、新明アに生起する3モーラ+2モーラの構造の複合名詞について、後部要素の語種別にアクセント型を整理した。結果を図1に示す。これによると、後部要素が漢語である場合と和語である場合とで分布に大きな相違はなく、平板型が最も多く、次いで3型のアクセントとなっている傾向が認められる。詳細に

は、0型が和語でより多く、2および3型が漢語でより多い傾向にある。外来語については総じての生起数が少ないものの、4型の生起数が最も多い。

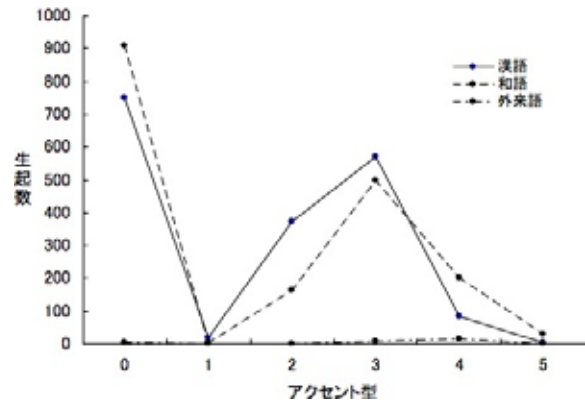


図1 後部要素の語種別のアクセント分布

新明アの3モーラ+2モーラ複合名詞のうち560語に二種以上のアクセントが記述されていた。これら560語の多くは、アクセントに「ゆれ」がある語であって、変化の途中にあることが考えられる。内訳の詳細は別稿[3]に委ねるものの、「新は」や「古は」による記述よりも見出しに複数アクセントが併記された語が多く、うち、見出しの第一にあるアクセントが0型で第二にあるアクセントが3型の組み合わせ(以降、「0・3型」と、第一にあるアクセントが3型で第二にあるアクセントが0型の組み合わせ(以降、「3・0型」)が多く生じていた。前者の生起数は181語、後者の生起数は82語であった。0・3型は例えば「アバラボネ(肋骨)」、「イヤクヒン(医薬品)」等、3・0型は例えば「イカリガタ(怒り肩)」、「キセツフー(季節風)」等である。

0・3型と3・0型について、後部要素の語種について調べたところ、0・3型では、和語が71、漢語が110、外来語が0で、漢語の占める割合が高かった。3・0型については、和語が44、漢語が38、外来語が0で、和語と漢語がほぼ同等に生起していることがわかった。0型が望ましいものは漢語に偏って、3型が望ましいものは和語と漢語に差なく生じているといえる。

続いて、生起数の多い0・3型および3・0型について、変化の経緯を検討するため、明解アのアクセント記述を調査し、比較する。新明アと明解アは、20年を隔てて出版された、同一の手続きにより作成された辞典であり、異同を比較することにより、どのような変化があったのかを読み取ることができると考えられる。

0・3型と3・0型は計263語である。これらについ

て、明解アでアクセントがどのように記述されていたかを調べた。結果は別稿にも掲出しており、ここでは、問題の把握のため、両辞典で異なるアクセント記述であった数について、表1に簡潔にまとめて示す。表は、例えば、明解アで3・0型であったものが新明アでは0・3型と記述されたものが25語あったことを示している。

表1 明解アと新明アの相違数

| 明解ア | 新明ア | 相違語数 |
|-----|-----|------|
| 3・0 | 0・3 | 25 |
| 0・3 | 3・0 | 1 |
| 0 | 0・3 | 9 |
| 3 | 3・0 | 18 |

明解アと新明アの異同に関しても、後部要素の語種との関わりを調べた。結果を表2に示す。明解アで3・0型、新明アで0・3型においては、後部要素が漢語の場合が優勢である。明解アで0型のみ、新明アで0・3型においては、後部要素が和語であるものが優勢である。さらに、明解アで3型のみ、新明アで3・0型においては、後部要素が和語であるものが優勢である。すなわち、0型が第二アクセントから第一アクセントに変化した語彙においては漢語が優勢であり、新明アで3型もしくは0型が追記された語彙においては和語が優勢との結果となった。

表2 明解アと新明アの語種別相違数

| 明解ア | 新明ア | 漢語 | 和語 |
|-----|-----|----|----|
| 3・0 | 0・3 | 19 | 6 |
| 0 | 0・3 | 1 | 8 |
| 3 | 3・0 | 5 | 13 |

4. 自発音声における複合名詞アクセントと語種

自発的な発話における複合名詞のアクセントと語種との関係を調べるため、大規模音声コーパスである『日本語話し言葉コーパス』(以下、CSJ)に出現する複合名詞のアクセントを調査した。

4.1 調査概要

分析には、CSJのコアを対象としたRDBを用いた[7]。データは、CSJの「コア」といわれる、東京ないし首都圏で出生した者が話者となった発話を対象とし

た。データのタイプには学会講演、模擬講演、対話、朗読があり、本稿の分析には朗読を除く三種を用いた。話者数はそれぞれ70、107、18の各名である。データベースより、前部・後部要素ともに名詞で、3ないし4モーラ+2モーラの構造を持つ語を抽出した。前部要素が5モーラ以上になると3要素の複合が中心となるため、前部要素は3モーラ、4モーラを対象とした。

前後の区間とあわせて、筆者がアクセントを聴取し、判断した。語中の音を必要以上に引きのばして発音する、語中にポーズを置くなどの言いよどみ、音が欠損するなど聞き取りにくい音声は対象外とした。

4.2 調査結果

3モーラ+2モーラの語は1,352、4モーラ+2モーラの語は1,495、計2,847の対象語がCSJより得られた。後部要素の異なりの生起数を調べたところ、189語となった。なお、以降の分析では、4型と3型はいずれも先行則によるものとして、同じ3型にまとめて扱った。4型は前部要素の最終モーラが特殊拍等で1拍前にずれて生じたアクセントであり、本稿では、この特殊拍等によるアクセント核の移動現象については論考外とする。

4.2.1 三種以上のアクセントが生じた後部要素の検討

3種以上のアクセントが観察された後部要素の一覧を、アクセントの生起数とともに、表3に示す。後部要素となった場合、連濁を起こす語彙も含まれるが、表中では辞書形を示した。なお、前部要素が4モーラの場合に、5型(2型)のアクセントは出現しなかった。前部要素が3モーラの場合には5型は頭高型となる。頭高型は前部要素のモーラ数によって6型、5型と相違することから表示のわかりやすさを考慮し、表中、「5型」の表示を省略し、「頭高型」とした。また、以下、後部要素が平板則、先行則など、どのような規則を持つかについては、新明アの見出し語、巻末の「アクセント習得法則」等により求めた。

最もアクセントの種類が多く生起している「タチ(達)」であるが、この語が後部要素となった複合語のアクセントは、前部要素のアクセントを生かしたものとなる。従って、複数のアクセントが生起することは妥当であり、いわゆる「ゆれ」とは異なる性質であるといえる。「セイ(性)」は、語例として「カノーサー(可能性)」、「ドクリッセー(独立性)」であり、CSJが講演音声を中心とした資料であるという特徴のために高頻度に出現した語彙であると考えられる。「セイ

(性)」は平板則であり、138語中、134語は規則通りといえる。しかしながら、「アンゼ'ンサー (安全性)」、「シューキセ'ー」などのアクセントも生成されていた。

三種類のアクセントが生じた10語について、生起アクセントの組み合わせパターンを整理し、検討する。

表3 三種以上のアクセントが生じた後部要素の一覧

| | 0型 | -1型 | -2型 | -3型 | 頭高型 | 計 |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 5 | | | | | | |
| タチ (達) | 2 | 4 | 3 | 75 | 2 | 86 |
| 4 | | | | | | |
| セイ (性) | 134 | 2 | 1 | 1 | 0 | 138 |
| 3 | | | | | | |
| ジン (人) | 5 | 0 | 71 | 159 | 0 | 235 |
| リツ (率) | 9 | 2 | 0 | 172 | 0 | 183 |
| オン (音) | 3 | 0 | 1 | 158 | 0 | 162 |
| カタ (方) | 28 | 10 | 33 | 0 | 0 | 71 |
| スー (数) | 2 | 0 | 1 | 66 | 0 | 69 |
| ナイ (内) | 5 | 0 | 1 | 29 | 0 | 35 |
| カナ (仮名) | 7 | 1 | 6 | 0 | 0 | 14 |
| ナリ (なり) | 5 | 1 | 1 | 0 | 0 | 7 |
| マツ (末) | 1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 4 |
| ヘン (辺) | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 3 |

0型と-2型と-3型 (以降、「0・-2・-3型」)が生じた語が多く、「ジン (人)」、「オン (音)」、「スー (数)」、「ナイ (内)」、「マツ (末)」の5語である。「ジン (人)」は、「アメリカ'ジン (アメリカ人)」と「ニホンジン (日本人)」のように、そもそも、アクセントが二様ある。これらに加え、CSJには平板型の「アメリカジン' (アメリカ人)」と「ニホンジン' (日本人)」が出現していた。「オン (音)」、「スー (数)」、「ナイ (内)」、「マツ (末)」は、いずれも先行則の語である。規則通りのアクセントに加え、0型と-2型とが出現している。

「リツ (率)」、「ヘン (辺)」は0・-1・-3型である。前者は先行則、後者は平板則の語である。生起数の多い「リツ (率)」について述べると、規則に従った-3型の生起が多いものの、0型も生じている。「カタ (方)」、「カナ (仮名)」、「ナリ (なり・形)」は0・1・2型である。「カタ (方)」は、前部の語のアクセントの式により複合名詞のアクセントが平板型、尾高型、中高型のいずれかになる傾向があり、多種のアクセントが生起することは妥当といえる。「カナ (仮名)」については、「オクリガナ (送り仮名)」の語を新明アで確認すると、0型、3型の順に併記されており、平板則・先行則の語であるといえる。しかしながら、-2型が多く生起しており、後部要素が頭高型の語ではないものの、後部要素の第1モーラに核を置くアクセントと

なっている。但し、「カナ (仮名)」に生じた14語は、特定の話者の「イタイガナ (異体仮名)」の語のみの発話であり、話者ないし単語個別のアクセント傾向である可能性もある。「ナリ (なり・形)」は原則として平板型であり、これに準じたアクセントであるが、-1型、-2型も生起している

総括すると、アクセントが多数、出現する後部要素は、前部要素のアクセント等が関係して決まるもの、平板則もしくは先行則のものであって、保存則の語は観察されなかった。

三種類以上のアクセントが生じた12語のうち、アクセント辞書に二種以上のアクセントが記載されている語、すなわちそもそもアクセントが複数認められる語が3語含まれている。これらを除いた残り9語について、後部要素の語種との関わりを指摘すると、7語が漢語であり、漢語が優勢であるといえる。

4.2.2 二種のアクセントが生じた後部要素の検討

二種のアクセントが生起する後部要素については、アクセントの組み合わせパターンから、0型と-3型、-2型と-3型、0型と-2型、0型と-1型、-2型と頭高型の5群に分けられた。概して、平板型が含まれる群が多い傾向にあり、新明アで高頻度に観察された0・3型ないし3・0型がCSJにも多く出現していることがわかった。

各組み合わせパターンについて、語例を挙げ、特に、規則と一致しないアクセント型の出現を検討しつつ述べたい。0型と-3型について、いくつかの特定の語が0型を高頻度に生起していることがわかった。「カイ (会)」、「チョー (長)」、「ブン (文)」などの語である。複合名詞としては、「ドーソーカイ' (同窓会)」、「テンジカイ' (展示会)」、「イインチョー' (委員長)」、「ジカンチョー' (時間長)」、「ギモンブン' (疑問文)」、「カイワブン' (会話文)」などが出現していた。一方、平板則の後部要素の複合名詞が、-3型に発音に発音される例も観察された。「チョーサ'ヒョー (調査票)」、「アイテ'ガワ (相手側)」などである。

-2型と-3型については、先行則の「エキ (駅)」で「モヨリエ'キ (最寄り駅)」が、保存則の「イチ (位置)」で「ゼンゴ'イチ (前後位置)」などのアクセントが出現している。「エキ (駅)」の語は、単独では1型に発音され、「モヨリエ'キ (最寄り駅)」のアクセントは、後部要素のアクセント核を複合名詞のアクセント核として保存した型といえる。一方、「ゼンゴ'イチ (前後位置)」では、「イ'チ (位置)」のアクセント核位置が複合名詞に保存されずに先行語の最終

モーラに置かれ、先行則と保存則の交替が生じているといえる。

0型と-2型では、平板則の「ジョー（上）」、「モノ（物）」に「チョーオンジョー（調音上）」、「センタクモノ（洗濯物）」、保存則の「ワシャ（話者）」に「タスワシャ（多数話者）」などのアクセントが出現している。これらにおける-2型の出現は、後部要素のアクセントが1型ではない語に生じており、保存則と他の規則との交替現象ではなく、後部要素の第1モーラにアクセント核を置くという、後部要素が2モーラの場合にはない規則の適用が新規に生じたと捉えられる。

全般に、平板則でないものに平板型が出現することが強い傾向としてあるものの、先行則に準じた-3型や、後部要素の第1モーラにアクセント核を置く-2型の出現も見られている。

続いて、語種とアクセント生起の関係について、0型と-3型の組み合わせパターンを例に挙げて検討を進める。新明アによりアクセント規則が把握できない等の語を除く30語について、語種を調べたところ、28語が漢語、2語が和語であり、漢語が頻出するという結果となった。生起したアクセントとの関わりについては、漢語の28語のうち、先行則に0型が生じたものが23、平板則に-3型が生じたものが5、和語の2語のうち、先行則に0型が生じたもの、平板則に-3型が生じたものはそれぞれ1語ずつであった。

5. まとめ

新明ア、明解アの用例を調査し、0型と3型が併記されている語に着目して語種とアクセント生起の関わりを検討したところ、新明アにおいて0型が第一、つまり望ましいアクセントとして記載されている語は、和語より漢語の方が多いたとの結果が得られた。更に、新明アと明解アとの比較により、新たに0型が望ましいアクセントとなった語彙においても漢語が優勢であることがわかった。これらのことから、0型の新規な生起は漢語でより多いことが推測され、いわゆる「アクセントの平板化」、アクセント変化現象において、漢語の方が進行が早いことが考えられ、語種によるアクセント変化の進行の相違が考えられる。

この点について、CSJの分析においても、多数のアクセント型が生起する後部要素は漢語が優勢であること、0型と-3型が生起する語についても漢語の生起頻度が高く、さらに、先行則が原則である語に0型が生起するものが顕著に多いとの結果が得られた。これら

の結果は、前述の、新明ア、明解アの結果と一致する傾向であると考えられる。すなわち、漢語において、アクセント変化の進行が早いことが示唆されたといえる。

但し、CSJについては、講演音声、中でも学会発表の音声が多いことから、専門用語の出現頻度が高く、例えば、先行則で0型が多く出現した「チョー（長）」の語では、「ケイゾクチョー（継続長）」、「ポインチョー（母音長）」、「セイドーチョー（声道長）」のような領域特有の語彙が多く見られていた。専門用語には漢語が頻出するため、CSJに基づいて語種とアクセント生起について議論することは、十分にデータを吟味する必要がある。

従来、アクセント変化と語種の関わりについて、特に複合名詞アクセント規則に関しての指摘は少ないようである。アクセントの平板化については、外来語や地名などについての言及が多い[8]。しかしながら、若年層およびその親世代の東京方言話者を対象に、前部要素が3ないし4モーラの外来語の地名で、2ないし3モーラの外来語を後部要素とする新規な複合名詞（例えばシカゴカメラ、シカゴシャツなど）の発音調査を行い、先行研究とは異なる視点による調査方法を採り、興味深い結果を示した研究もある[9]。例えば「カナダパン」のような、後部要素の最終モーラが撥音の場合、若年層に平板型が生じるという結果である。外来語を後部要素とした複合名詞においても、平板化現象が起こりうることを示されている。

本稿の分析では、特に0型と-3型の共起に焦点を当てて分析を進めたため、アクセント変化について全容を捉えきれなかった。今後、対象を拡大して分析を継続したいと考えている。

謝辞 研究の遂行にあたり、アクセント辞書のデータに関して、東京外国語大学佐藤大和先生に貴重なご意見をいただきました。また、国立国語研究所前川喜久雄氏よりCSJのデータをご提供いただきました。両氏に深謝申しあげます。本研究の一部は国立国語研究所基幹型共同研究「コーパス日本語学の創成」による成果である。

参考文献

- [1] 佐藤大和 (1993) 「共通語アクセントの成因分析」『日本音響学会誌』49-11, pp.775-784.
- [2] 秋永一枝編 (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』三省堂.
- [3] 白勢彩子・張永林 (2014) 「アクセント辞書および自発発話

音声における複合名詞のアクセント」『音声研究』18-2, pp.23-29.

- [4] Kubozono, Haruo (1997) " Lexical markedness and variation: A nonderivational account of Japanese compound accent. " Proceedings of The West Coast Conference on Formal Linguistics, 15, pp.273-287. CSLI, Stanford.
- [5] 田中真一・窪蘭晴夫 (1999) 『日本語の発音教室—理論と練習—』くろしお出版
- [6] 秋永一枝編 (1981) 『明解日本語アクセント辞典 第二版』三省堂.
- [7] 小磯花絵・伝康晴・前川喜久雄 (2012) 「『日本語話し言葉コーパス』RDBの構築」第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, pp.393-400.
- [8] 田中ゆかり (2010) 「外来語アクセント平板化現象の実態と意識」『首都圏における言語動態の研究』笠間書院.
- [9] 儀利古幹雄 (2011) 「東京方言におけるアクセントの平板化—外来語複合名詞アクセントの記述—」『国立国語研究所論集』1, pp.1-19.